

約束を必ず果たす神

〔聖書〕 士師記 4章 1～16節

エフドの死後、イスラエルの人々はまたも主の目に悪とされることを行い、主はハツォルで王位に就いていたカナンの王ヤビンの手に、彼らを売り渡された。ヤビンの將軍はシセラであって、ハロシェト・ハゴイムに住んでいた。イスラエルの人々は、主に助けを求めて叫んだ。ヤビンは鉄の戦車九百両を有し、二十年にわたってイスラエルの人々を、力づくで押さえつけたからである。ラピドトの妻、女預言者デボラが、士師としてイスラエルを裁くようになったのはそのころである。彼女は、エフライム山地のラマとベテルの間にあるデボラのなつめやしの木の下に座を定め、イスラエルの人々はその彼女に裁きを求めて上ることにしていた。さて、彼女は人を遣わして、ナフタリのケデシュからアビノアムの子バラクを呼び寄せて言った。「イスラエルの神、主がお命じになったではありませんか。『行け、ナフタリ人とゼブルン人一万を動員し、タボル山に集結させよ。わたしはヤビンの將軍シセラとその戦車、軍勢をお前に対してキシオン川に集結させる。わたしは彼をお前の手に渡す』と。」バラクはデボラに言った。「あなたが共に来てくださるなら、行きます。もし来てくださらないなら、わたしは行きません。」デボラは、「わたしも一緒に行きます。ただし今回の出陣で、あなたは榮譽を自分のものとすることはできません。主は女の手でシセラを売り渡されるからです」と答え、直ちにバラクと共にケデシュに向かった。バラクはゼブルンとナフタリをケデシュに召集した。一万人が彼に従って上り、彼と共にデボラも上った。カイン人のヘベルがモーセのしゅうとホバブの人々、カインから離れて、ケデシュに近いエロン・ベツァアナニムの辺りに天幕を張っていた。シセラはアビノアムの子バラクがタボル山に上ったとの知らせを受けると、すべての戦車、すなわち九百両に及ぶ鉄の戦車に加えて自分に属するすべての軍隊を召集し、ハロシェト・ハゴイムからキシオン川に向かわせた。デボラはバラクに言った。「立ちなさい。主が、シセラをあなたの手にお渡しになる日が来ました。主が、あなたに先立って出て行かれたではありませんか。」バラクは一万の兵を従え、タボル山を下った。主は、シセラとそのすべての戦車、すべての軍勢をバラクの前で混乱させられた。シセラは車を降り、走って逃げた。バラクは、敵の戦車と軍勢をハロシェト・ハゴイムまで追いつめた。シセラの軍勢はすべて剣に倒れ、一人も残らなかった。

〔序〕 約束の地に定着した神の民

旧約聖書には、神の民として選ばれたイスラエルの歴史とその信仰がしるされています。イスラエルの民の始祖アブラハムは、神から世界のすべての民の祝福の源となるようにとの召命を受け、文明の発祥地といわれるチグリス・ユウフラテス川の流域から、カナンの地に移住して来ました。

子孫のヤコブの代に世界的大飢饉が起こり、エジプトに逃れ、その肥沃な地で大きな民族に成長します。危険を感じたエジプト王に弾圧され、モーセに率いられてエジプトを脱出しました。壮年男子だけでも60万人、婦女子や他国人と家畜を加えると大変な集団の大移動でした。彼らは荒野の生活40年を経て後継者ヨシュアの指揮のもとに、約束の地カナンに戻ってきました。

そして先住民の間に、12部族が分かれて定着していきます。紀元前1400年頃とも1200年頃とも

言われています。そしてダビデによって先住民を完全に支配してヘブル王朝が生まれたのが紀元前 1000 年です。

ヨシュアの死後からダビデ王国の発足までの約 400 年とも 200 年とも言われる歴史が士師記、サムエル記上に記されています。そしてダビデ王から王朝の滅亡する紀元前 587 年までの歴史がサムエル記下から列王記上下に記されています。

聖書教育のカリキュラムでは、この 800 年或いは 600 年にわたる歴史を記す士師記から列王記下までを、5月から9月末までの5ヶ月間で目を通します。そこで礼拝のメッセージも特別なことがない限り、それにそっていきます。今日はその第一回目、女性の士師デボラの働きから、メッセージを汲み取りましょう。

[1] カナン文化への同化

イスラエルの民はアブラハム以来、羊飼いをして暮らしてきました。エジプトに移り大集団に成長しましたが、これも青草の豊かなゴシェンの地で、羊が大いに繁殖したからです。エジプトを脱出して、シナイの荒れ野を40年間さまよいましたが、150万人の集団が生き抜くことが出来たのも、彼らが羊飼いだっただけに他なりません。

その荒れ野の40年間に、モーセの指導のもと、12部族の連合体として組織を整え、神から与えられた律法を、神の民としての信仰生活の指針としました。そして後継者ヨシュアに導かれ、約束の地カナンに入って行ったのでした。先住民が弱い周辺の丘陵地帯や荒れ野では、先住民を押しつけて、自分たちの生活圏を打ちたてることは、比較的容易だったことでしょう。

しかし川の流れる平野の農耕地帯には、豊かな先住民が既にしっかりとした農業文化の生活圏を確立しています。その上彼らにとっては未経験な農作業が待ち受けています。先住民を排除するどころか、彼らの指導と援助を求めなければならない立場です。農業共同社会から生まれて来る宗教生活も、厳しい荒れ野を舞台とする信仰とは質を異にします。農作業の交流が始まって、息子娘たちと土地の住民の娘息子たちとの結婚が、イスラエルの民のカナン文化への同化を促しました。

こうして羊飼いの生活が農業文化に同化することで、信仰生活の独自性も失われ始めました。士師記は2章に入ると早速次のように記述しています。「その後、主を知らず、主がイスラエルに行われた御業も知らない別の世代が興った」「彼らは自分たちをエジプトの地から導き出した先祖の神、主を捨て、他の神々、周囲の国の神々に従い、これにひれ伏して、主を怒らせた。彼らは主を捨て、バアルとアシュレトに仕えたので、主はイスラエルに対して怒りに燃え、彼らを略奪者の手に任せて、略奪されるがままにし、周りの敵の手に売り渡された。彼らはもはや敵に立ち向かうことができなかった」(2:10~14)。

このような状況のもとで、主はご自分の心を示す士師をその折り折りに、お立てになって、神の民

が異教徒に吸収されて消えていくことがないように、守られたのでした。

[2] 神の大勝利

デボラは、ラビトの妻で預言の賜物を神さまから与えられていました。そしてエルサレムから北約40キロほどのエフライムの山地で、裁きを求めて各地から来る人に、士師として裁きを与えていました。当時カナン王ヤビンは鉄の戦車 900 台という強力な武力を背景にして、イスラエルの民を20年間にわたって徹底的に押さえつけていました。神さまは救いを求めるイスラエルの叫びに答えて、遂にデボラに指示をお与えになりました。

デボラは北に約 140 キロ、ガリラヤ湖の更に北のケデシュに暮すバラクを呼び寄せました。「イスラエルの神、主がお命じになったではありませんか。『行け、ナフタリ人とゼブルン人一万を動員し、タボル山に集結させよ。わたしはヤビンの將軍シセラとその戦車、軍勢をお前に対してキシオン川に集結させる。わたしは彼をお前の手に渡す』と」。ナフタリ族とゼブルン族はガリラヤ地方に定住したイスラエル12部族の一員です。バラクはそのリーダーだったのでしょう。

タボル山はガリラヤ湖の南西約 10 キロ、キシオン川の流域に広がるイズレエル平野の北の端にある高さ 588mの山です。その山に集結して、戦車 900 台でキシオン川を攻め上ってくるカナン軍を撃破するよという神さまの命令でした。しかしバラクはためらいました。「あなたが共に来てくださるなら、行きます。もし来てくださらないなら、わたしは行きません」。どうしたことでしょうか。

5章のデボラの歌の7～8節をご覧ください。「イスラエルの4万人の中に、盾も槍も見えたであろうか」とあります。たとえ4万人の兵士が集まっても、最低の武器である盾や槍を持っている者がいない、皆が手製の武器しか持たない農民兵だったからです。これでは戦車に立ち向かえません。たちまち蹴散らかされてしまいます。

しかしバラクはデボラが預言者であり、士師として立てられていることを知っています。もし神さまが本当にデボラにそう命じられたのなら、従わなければなりません。そこで本当に神さまのお告げかどうか、デボラを試したのではないのでしょうか。デボラは言下に答えました。「わたしも一緒に行きます」。バラクはデボラのこの毅然たる態度に促され、一緒にカナンの平野を南から北に 140 キロ縦断してケデシュに向い、兵士を招集したのでした。その距離は今の関越道なら大泉から水上の距離です。

カナン軍の司令官シセラが鉄の戦車 900 台に加えて自分の部隊全軍も動員して、キシオン川に集結しさかのぼってきました。キシオン川は全長 37 キロですが雨の降らない乾期には、川水が流れるのは下流 10 キロ余で、上流の川床は乾いた道になります。その川床を戦車隊を先頭に大軍が、タボル山目指して押し寄せて来たのでした。

ところが5:21をご覧ください。「キシオン川は彼らを押流した。太古の川、キシオン川が。わが魂よ。

力強く進め」。突然大雨が降り出したのです。乾いていた川床は一挙にぬかるみとなり、重い鉄の戦車の車輪が泥にめり込んで動けなくなり、激流に流される破目になりました。兵士は戦車から飛び降りて逃げ出しました。こうして敵軍はタボル山を一挙に駆け下ったイスラエル軍によって、全滅してしまったのです。

シセラはヘベルの妻ヤエルの天幕に逃げ込みました。喉が渴いていたので水を求めると、ヤエルは凝乳(5:25)を差し出しました。発酵してアルコール分が含まれています。シセラは酔いが回り熟睡している間に、ヤエルによって頭に釘を打ち込まれて死んでしまいました。この大敗北でカナン王はやがて没落します。

こうして神さまは、戦場では全く出番のないはずのか弱い二人の女性をお用いになって、神の民を滅亡から救い出されたのです。

[結] 御言葉に聴き従う信仰

男のバラクは、貧弱な武器しか持たない自分たちの実力をよく知っていました。自分たちを押さえつけているカナン王に対して、勝ち目は全くありません。「戦え、勝つ」と神さまが命じられたとは、どうしても信じられなかったのでしょうか。でもデボラの確信に満ちた態度に圧倒されて、彼女と行動を共にすることにしたのでしょう、

ではデボラはどうして確信することが出来たのでしょうか。デボラは、今自分たちが約束の地カナンに居るといふ事実に立って、神さまを信じたのです。自分たちが今この地に居るのは、出エジプトに際しての、あの劇的なドラマのお陰です。強大なエジプト王国の戦車・騎兵隊の精鋭に追い詰められながら、カナンの地を与えると約束された神さまは、東風を送り海の水を二つに分けて、150万の大集団を向う岸に渡らせ下さった。そして追いつがるエジプト軍を海に呑み込ませてしまわれたのです。

一体海の水を分けて、進む道を備えるなどということを、誰が思いつくのでしょうか。しかし神さまは、人の心に思い浮かびもしない救いを備えて下さるお方なのです。この全知全能なる主が、私たちに約束の地にこの通り住まわせてくださっている。だから私たちは滅びない。神さまは御手の力をふるって必ず救い出して下さると確信して、デボラは祈ったのです。そして示された御心をそのまま信じて、バラクに伝えたのです。

バラクが御言葉に従って兵士たちを召集し、「立ちなさい。主があなたに先立って出て行かれた」というデボラの声に押し出されて、タボル山から攻め下った時に、天から大雨が降り、精鋭の戦車隊が混乱して、全滅してしまいました。

神さまは「目が見ず、耳が聞きもせず、人の心に思い浮かびもしなかったことを、御自分を愛する者たちに準備」(Iコリント2:9)して下さるお方です。神さまは「約束されたことを、必ず実現される

力をお持ちの方だと確信して」(ロマ 4:21)、御言葉に聞き従っていく信仰を、デボラは身をもって、私たちに証してくれました。

イエス・キリストは、十字架の死に至るまで、神の御心に聞き従われました。そして復活の栄光をお受けになったのです。私たちも、イエス・キリストを見上げつつ、神さまの愛と力を確信して、祈り、聞き従って、信仰の勝利を証しして参りましょう。

完